

## The training for Sea Scoutmasters before WWII in Japan : Who got into the training courses and what they learned

圓入, 智仁  
九州大学大学院博士後期課程1年

<https://doi.org/10.15017/3680>

---

出版情報 : 飛梅論集. 5, pp.41-54, 2005-03-18. Graduate School of Human-Environment Studies,  
Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# 戦前の海洋少年団の指導者養成

—誰がどのような訓練を受けたのか—

圓 入 智 仁\*

## 1. はじめに

本稿は、第二次世界大戦前における少年団、その中でもとりわけ海洋少年団の指導者養成に着目し、参加者の属性と訓練内容から、当該時期における海洋少年団の活動の性格を考察することを目的とする。

本稿は戦前における男女青少年団体（少年団や青年団、処女会など）における指導者養成に関する研究の一部をなすものである。指導者養成とは、各団体の中央部が、各地における実際的な指導者に知識や技能を伝える場であり、さらには、機関誌や書物などの印刷物では伝えきれない、男女青少年団の指導者としての考え方や加盟員に対する態度などを、実践的に教える場でもあったと想定される。これまでの社会教育史におけるこれら男女青少年団体に関する研究蓄積では、指導者養成が行われていた事実に関する記述はあるものの、以下で述べるとおりの、具体的な内容についての言及はない。

青年団の全国組織である中央報徳会青年部が組織されたのは1916（大正5）年だが、青年団の指導者養成は、1925（大正14）年に大日本連合青年団が結成された後、1930（昭和5）年から青年団指導者養成所として始まった。初回の講習期間は2月3日から3月25日までで、全国から45名が集まり、農村研究や政治経済などの講習を受け、中途退所者を除いて42名が修了した<sup>1)</sup>。同年中に第二回が開催され、翌年には青年団講習所に改称し、年に2-3回、開催された。特に、下村湖人がその所長を務めた1933（昭和8）年から1937（昭和12）年の間について君島和彦は、青年団講習所が「自由主義的な運営方針」であったと評価している<sup>2)</sup>。しかし青年団講習所で、具体的に誰が何を学んでいたのかは、明らかになっていない。

1918（大正7）年に処女会中央部が設立された処女会については、渡邊洋子が、1920（大正9）年10月3日から8日まで、帝国教育会で初めての全国処女会指導者講習会が開催され、全国から198名が参加したことを明らかにしている。講習会では、処女会の理事や評議員だった内務省と文部省の関係者、各学校の校長や教授が講師を務めた。だが、次年度以降の処女会指導者講習会について渡邊は、「毎年実施されたと推測されるが、これに関わる詳細な記録は見いだされていない」とする<sup>3)</sup>。

---

\*九州大学大学院博士後期課程1年

1922（大正11）年に設立された少年団日本連盟における指導者養成は、1925（大正14）年から始まった。英国のボーイスカウトの指導者養成を修了した人物を中心として、指導者訓練所が富士山麓の山中湖畔で開催され、76名が参加した。そこでは、英国の指導者養成に範をとり、キャンピングや追跡法など実践的な訓練が行われていた。参加者には「社会的地位を忘れて14～15歳の少年になること」、「入所中は一切批判を行わないこと」などの「宣誓」が求められた<sup>4)</sup>。翌1926（大正15）年には愛知県と大分県の2カ所で開催された。指導者実修所に改称した1927（昭和2）年以降も、単年度に何回も開催していた。しかし、これまでのところ、少年団における指導者養成に焦点を当て、具体的に論じた研究は皆無である。

本稿の対象となる海洋少年団とは、英国で始まったボーイスカウトから派生したシースカウトが、1923（大正12）年頃から日本に導入され、各地で組織された団体である<sup>5)</sup>。1925（大正14）年4月13日、海洋少年団を専門に扱う海洋部が少年団日本連盟の組織として設置された<sup>6)</sup>。海洋部長に任命されたのは、当時、東京海洋少年団の副団長として子どもたちの指導に当たっていた、原道太退役海軍大佐である<sup>7)</sup>。海洋少年団の指導者養成は、1928（昭和3）年、少年団日本連盟が本部規則を改訂し、少年団日本連盟海洋部が独自に海洋少年団の指導者養成を行う海洋指導者実修所を開設できるようしたことに始まる<sup>8)</sup>。上述の「指導者実修所」を海洋活動に特化したのが海洋指導者実修所であり<sup>9)</sup>、少年団日本連盟海洋部が1938（昭和13）年、大日本海洋少年団として独立する前年まで、ほぼ毎年、各地の教育施設や海浜、少年団日本連盟の練習船において1週間前後、開催されていた。

筆者はこれまで、少年団日本連盟海洋部の組織や中心人物の理念、少年団日本連盟が所有していた練習船を通じた活動など、主に戦前の海洋少年団について研究してきた。そこで得られた知見は、戦前、海軍は海洋少年団にほとんど関与していなかった点である。この点を別の角度から検証する視点として、本稿では、海洋少年団に関わる大人が訓練を受ける、海洋指導者実修所に着目する。

## 2. 海洋少年団の設立と海洋指導者実修所の開催場所

少年団日本連盟の機関誌『少年団研究』には、随時、少年団日本連盟に登録された全ての少年団の団名が掲載されており、また1928（昭和3）年、1930（昭和5）年、1934（昭和9）年、1937（昭和12）年には、少年団日本連盟の『加盟団名簿』が発行されていた。それらによると、各年末の時点で少年団日本連盟に登録されていた海洋少年団の数は、図1の通りである。1938（昭和13）年に大日本海洋少年団を立ち上げるまでの間、少年団日本連盟に加盟する海洋少年団は、その数を右肩上がりで増やしていた。1936（昭和11）年12月の時点で37団、団員2,518名、指導者507名が登録されていた<sup>10)</sup>。本稿で考察する海洋指導者実修所には、ここで挙げた海洋少年団の現役指導者や、これから指導者になろうとする者が参加していたのである。

なお、この時点における海洋少年団の規模は、次に示す通り、大小様々であった。団員数が最も少ないのは水之浦海洋少年団（長崎県）で、団員4名、指導者3名であった。次いで清水市海洋少年団（静岡県）の団員7名、指導者10名、そして清水海洋少年団（愛知県）の団員10名、指導者5名で

戦前の海洋少年団の指導者養成

あった。逆に団員数が最も多いのは、淀江海洋少年団（鳥取県）で、団員662名、指導者23名であった。次いで大日本直江津海洋少年団（新潟県）の団員189名、指導者50名、そして唐丹海洋少年団（岩手県）の団員148名、指導者8名であった。

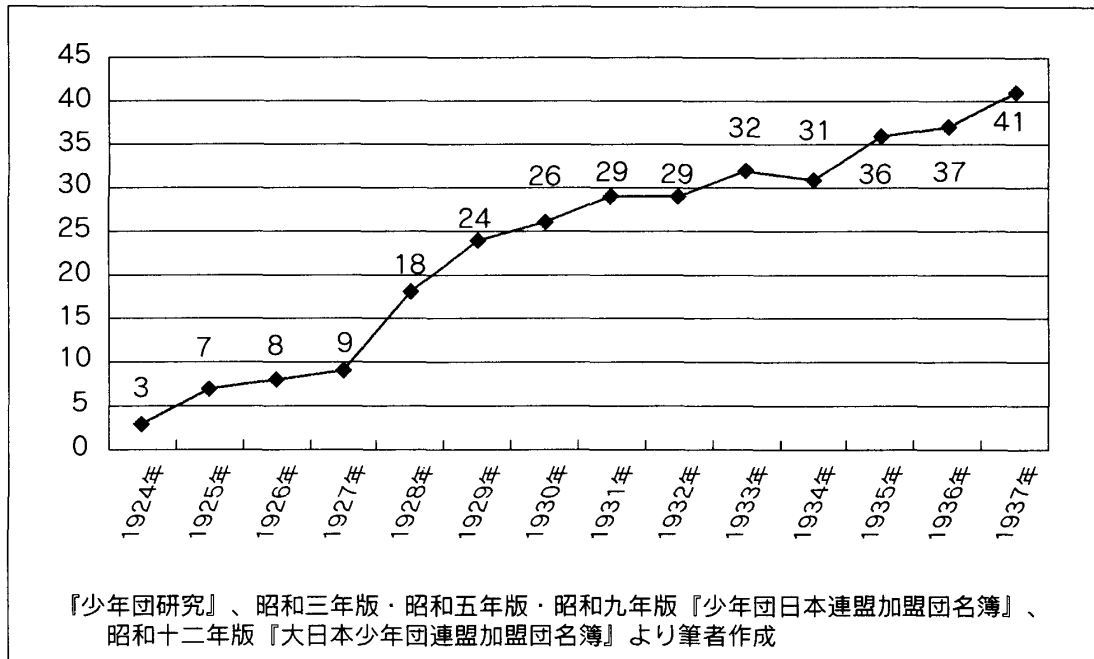


図1 各年末に少年団日本連盟に登録している海洋少年団数

清水海洋少年団と唐丹海洋少年団は小学校長が団長を務め、団事務所も小学校にあった。また淀江海洋少年団と大日本直江津海洋少年団は町長が団長を務めていた。町長が団長を務めている海洋少年団は、この2個団だけであり、町全体から団員が集まっていた可能性がある。小学校長が団長を務めている団（その全ての団の事務所は小学校内）は他に8個団あったが、会社員や実業者などが団長を務める他の海洋少年団と比較しても、学校で結成された海洋少年団に、特に団員が多いといった傾向は見られない<sup>11)</sup>。

海洋指導者実修所の開催年月日と場所は表1の通りである。1934年に開催されていないのは、同年7月15日から11月4日まで、少年団日本連盟の練習船を利用して全国から選抜された海洋少年団員が東南アジア一周航海を実施したためと考えられる。計10回開催された海洋指導者実修所には、延べ人数で182名、実人数にして174名が参加した。

海洋指導者実修所をどこで開催するかは、少年団日本連盟海洋部がいくつか候補を提示して参加希望の多い場所で開催する場合（例えば1929年の宮島）と<sup>12)</sup>、地方から希望が出されて開催する場合（例えば1935年の釜石）があった<sup>13)</sup>。参加者の居住地が全国に散らばっている、1928（昭和3）年の神戸から1932（昭和7）年の福井までは、少年団日本連盟海洋部側が開催地を決定し、参加者の居住地が開催地に近い1933（昭和8）年以降は、各地域からの希望に応じて開催されたと考えられる。

表1 海洋指導者実修所の開催場所

	宿泊地	活動場所	参加人数	延べ参加者累計
1928年8月6日～13日	神戸商船学校（野営）	大阪湾	20	20
1929年8月3日～9日	広島県宮島（野営）	広島湾	30	50
1930年7月28日～8月4日	東京～静岡間の寄港地（野営）	東京湾～静岡沖	12	62
1931年（月日は不明）	鳥羽商船学校（合宿）	三重県伊勢湾	14	76
1932年7月26日～8月1日	（不明）	福井県小浜湾	12	88
1933年7月22日～28日	（不明）	神奈川県三浦半島沖	13	101
1935年7月24日～28日	佐渡中学校（合宿）	佐渡島真野湾	14	115
1935年8月9日～13日	釜石商業学校（合宿）	釜石港	15	130
1936年8月1日～6日	（不明）	鳥取県米子沖	30	160
1937年8月10日～14日	長崎県立水産学校（合宿）	長崎湾	22	182

『少年団研究』より筆者作成

### 3. 海洋指導者実修所の参加者

次に、海洋指導者実修所参加者の属性を分析する。海洋指導者実修所に参加した実参加人員174名が所属していた少年団の内訳は、海洋少年団106名、陸の少年団28名で、残りの40名は、空欄もしくは各回の参加者名簿に所属欄がなかった。海洋指導者実修所は海洋少年団の指導者を育成することが目的であったことから判断すると、海洋少年団に所属していない参加者は、将来的に海洋少年団に関わりを持つことが予定されていた者と考えられる。指導者はそれぞれ少年団に所属していたが、それとは別に職業を持っていた。ちょうど、現在のボーイスカウトにおける、ボランティアとしての指導者という役割と同じである。

参加者の職業別内訳は図2の通りである。実参加人員174名の内、93名の職業が不明であることは考慮しなければならないが、小学校教員や学生（高校、大学、専門学校）の人数が比較的多いことを、まず指摘しておきたい。

参加者の職業について、さらに検討する。1928（昭和3）年に初めて開催された海洋指導者実修所への参加者20名の内、職業が明らかになっているのは、学生3名、商業2名、公吏1名、小学教員1名であった。他に、職業を明記していないものの（図2では「不明」に分類）、2名が住所が小学校となっていた<sup>14)</sup>。さらに、このときの海洋指導者実修所を振り返って、所長の原道太は「参加者の多くが学校教育者であって、少年団に対しては白紙にて来会せられた方が多い」と述べている<sup>15)</sup>。ここでいう「学校教育者」には、いずれも職業欄が「不明」の愛知県の清水海洋少年団2名、鳥取

戦前の海洋少年団の指導者養成

県の淀江海洋少年団3名と米子市就將海洋少年団1名も含まれると考える。これらの団の事務所が小学校に設置されており、団長を小学校長や町長が務めていたことが、その理由である<sup>16)</sup>。学校に拠点を置く海洋少年団からの参加者は、校長など学校関係者からの指示で海洋少年団に関わっていたとも考えられる。

このように、第1回目の海洋指導者実修所への参加者20名のうち、職業が不明である13名の中にも、学校教育者、具体的には小学校教員が少なからず存在していた可能性が指摘できる。

そのことは、次年度以降の海洋指導者実修所にも該当する。

1929（昭和4）年、宮島で開催された第2回海洋指導者実修所の参加者30名の内、職業を明記していたのは学生8名、商業2名、画家1名の11名であった。職業は明記していないが、居住地に小学校を記載している者が4名いた<sup>17)</sup>。続く1930（昭和5）年から1933（昭和8）年に行われた海洋指導者実修所でも、職業欄に明記していない半数弱の参加者で、住所が小学校となっている者が数名確認できる。

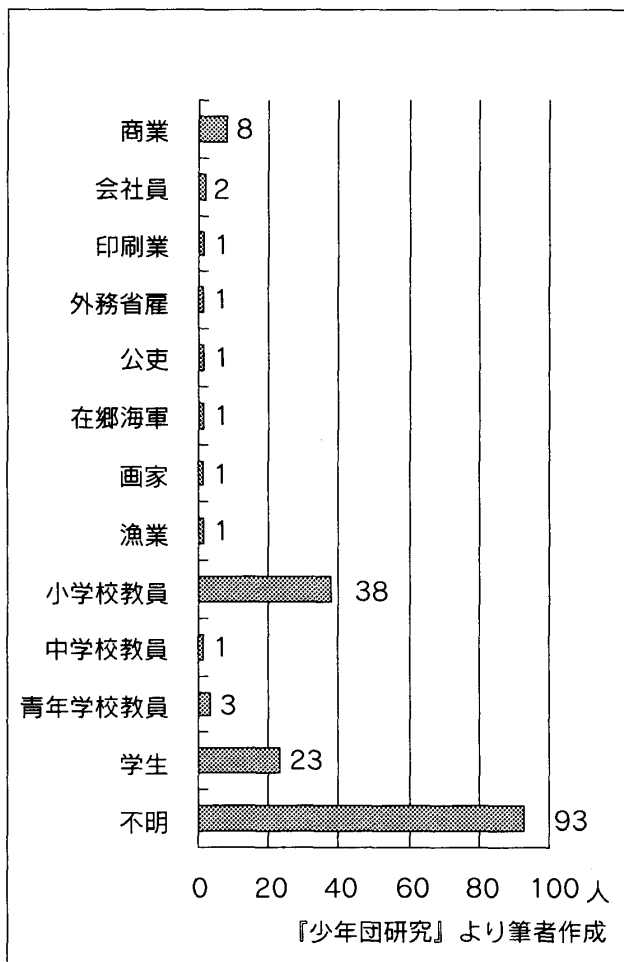


図2 参加者の職業内訳

表2 海洋少年団数と海洋指導者実修所参加者

	1937年末現在の 海洋少年団数	海洋指導者実修所 参加実人数
北海道	2	2
岩手	3	14
宮城	3	2
東京	5	24
神奈川	2	4
新潟	3	11
石川	2	1
福井	1	3
静岡	1	3
愛知	2	4
大阪	1	14
兵庫	2	9
和歌山	2	0
鳥取	3	46
広島	1	3
福岡	1	3
長崎	4	26
台湾	2	5
朝鮮	1	0
合計	41	174

『少年団研究』より筆者作成

1935（昭和10）年に佐渡で行われた海洋指導者実修所と、1936（昭和11）年に米子で行われた海洋指導者実修所の参加者の職業と住所は、『少年団研究』に明示されていなかった。その一方で、1935（昭和10）年、釜石で開催された海洋指導者実修所では、参加者15名の内13名が小学校教員、また1937（昭和12）年に長崎で開催された海洋指導者実修所では参加者22名の内19名が小学校教員であった<sup>18)</sup>。

戦前の少年団には、その当初から学校を基盤として組織されたものと、地域の希望者を募って組織されたものがあったことは、陸の少年団の研究を進めてきた田中治彦の指摘するところである<sup>19)</sup>。1937（昭和12）年当時、小学校長や小学校教員、町長が団長を務め、団の事務所を小学校に置いていた海洋少年団は、岩手に2団、東京に2団、新潟に1団、福井に1団、愛知に1団、鳥取に2団、台湾に1団あった。この事実と表2の比較から、これらの府県からの参加者が多い傾向が読み取れる。このことも、海洋指導者実修所への参加者の中に、小学校の教員が多かったことを示唆していよう。

#### 4. 海洋指導者実修所の内容

##### (1) 第一回海洋指導者実修所

1927（昭和2）年、第一回海洋合同訓練が開催された。しかし、既述の通り海洋指導者実修所の開催には規約上の制約があったため、翌年まで待たねばならなかった。

第一回海洋指導者実修所は、1928（昭和3）年8月6日から13日まで、兵庫県武庫郡本庄村の神戸高等商船学校内にある松林において、前年に初めて開催された海洋合同訓練の第二回目と同時に開催された。

大人を対象とした海洋指導者実修所と少年達の海洋合同訓練は、両方ともキャンプ生活を基本としていた。前者は海上における技能訓練よりも海洋少年団の指導方法や経営の研究に重点を置いており<sup>20)</sup>、いわば、海洋少年団活動の教育実習であった。また後者は前年同様に、神戸高等商船学校に備えられている船の機関や制御装置、電気設備、計器など航海に必要な設備の実物や標本の見学、学校に備え付けてある「カッター」や「ヨット」等での航海訓練、そして水泳など、商船学校の設備を利用した活動が行われた<sup>21)</sup>。子どもたちが日頃、各団で経験できないことをこの海洋合同訓練で行っていたのである。この海洋合同訓練で原は、「海洋健児の訓練は、海上そのものが、最も主要なる訓練場であり、最大の教材である」と述べ（海洋健児とは、海洋少年団員のこと）、その具体例として「潮流の干満、落潮流や、漲潮流の方向、天象、地象の変化観察、水産動植物の採集等」を挙げている<sup>22)</sup>。

期間中、海洋合同訓練と海洋指導者実修所の参加者が、兵庫県の水上警察署の保安丸に便乗して淡路島に渡った。便乗して淡路島に向かっている間、海洋指導者実修所の参加者は海図やコンパスを使って船の位置や航路の研究をすると共に、羅針盤の読み方や操縦を学んだ。また海洋少年団員は機関の見学するなどして、実地訓練を行った<sup>23)</sup>。

この時の海洋合同訓練や海洋指導者実修所の運営に関わったのは、少年団日本連盟海洋部の原道太と足立脩蔵、田村喜一郎であった。さらに参与として関わっていた神戸高等商船学校教授や兵庫

県社会教育主事なども、何らかの実修指導にあたっていたと考えられる<sup>24)</sup>。参加者は全国から20名が集まった<sup>25)</sup>。

## (2) 第二回海洋指導者実修所

第二回海洋指導者実修所の案内が『少年団研究』に掲載されたのは、1929（昭和4）年6月であった<sup>26)</sup>。そこに海洋指導者実修所の概略が以下のように記されている。

### 一、教程 実地、理論両教程

教程中には実修所より提唱するもの以外、参加指導者より本教育に関し必要なる課題（指導経営等に関する）を提出せしめ、其中の二三重要科目に付互に審議討究す。

### 二、場所

(イ) 第一予定地 広島湾内（宮島、江田島）

(ロ) 第二予定地 摂津湾内（深江明石淡路地方）

(中略)

(イ) 教材を江田島兵学校に借り、約一日間準備訓練の後宮島大元公園の背面青苔浦に野営実修を開催、此の浦は宮島七浦七社の唯一にして平生人跡全く絶へ老松古杉千古斧鉞を入れざる原始林にして、清冽玉の如き清流涼々として流れ、盛夏の候尚ほ肌の冷かなるを覚へ野生の鹿亦時に来り遊ぶ、トテモ普通内地の山林地帯に想像の出来ざる幽邃無比の地、大元公園より約二里にして海岸の小湾。

(ロ) 神戸高等商船学校（阪神線深江駅下車）集合の上明石淡路方面に移動野営巡航実修訓練の予定にして、須磨明石付近を巡航し、明石にては水産に関する実修を為し得る可能性あり。

申込者の希望により、開催地は「広島湾内、宮島、江田島」と決まった<sup>27)</sup>。

原は前年、海洋合同訓練と海洋指導者実修所を同時に開催した点を「一利一害、殊に二兎を逐ふものは一兎を得ずという嘆も免れなかつた」と反省し、少年達の訓練との同時開催をせず、指導者養成に集中すると実修所開催前に宣言した。また原は海洋指導者実修所に参加するに当たっての準備として、以下のことを求めた<sup>28)</sup>。

準備知識としては、別に必ずしも要求はしないが、本邦海の歴史地理に就ては勿論、少年団教育中、海洋に関する多少の疑問と予備知識があれば、互に研究上非常に有利である、例令潮流、潮汐の満干、海上気象等の如きも、その一つである。

又野営中には、造船の手工芸として、玩具の帆船等を造り、装、帆帆具の名称、用途等を知り、実修土産にもなるから、相当の小刀や彫刻用鑿があれば携帯をお勧めする。

又結索等にも必要があるから、各自是に要する索具を些許り準備されたいのである、手旗



信号旗も所有の方は、必ず携帯されたいのである。

参加した海洋少年団の指導者達は、結索、手旗信号、そして海洋に関する歴史や地理、潮の干潮、気象などの訓練を受けていた。その指導に当たったのは少年団日本連盟の原と田村、神戸海洋少年団の指導者2名、東京海洋少年団隊長らであった<sup>29)</sup>。

この時の実修は、近くの海軍兵学校から必要な機材を借りていたが、直接、兵学校の関係者から指導を受けることはなかったようである。その活動について、原は以下のように述べている<sup>30)</sup>。

凡てが、自己啓発であり、自己創作であり、或は起床と同時に当日航海上の海図使用法の要点を一瞬間に課し、出発用意、と食事用意の間に其回答を配布のノートに記載すべく頭脳に印象を与へて、愈々兵学校棧橋を出てより巖島青海苔浦までの針路、距離、変針路、風向、風力、潮流、海峡の状況が立派に手記されねばならぬ程の忙しさであるが、誰が何んと言ふのでもなくして実修生、訓練者、諸君が自ら海図と三角定規と「コンパス」に依りて研究し、<sup>マ</sup>攻究し、<sup>マ</sup>実際实地に実物を見て一々之に明答を与えなければならぬから一層忙しいのであつて、之は又一々点検捺印を取られる真剣さである。

第4日目と第5日目に実施された、「宮島<sup>マ</sup>一週、帆走、橈走、航路探求、潮流調査」の様子である。野営に必要なテントの点検、料理の準備などの合間を縫って、レポートを仕上げる参加者の様子や、それを一つ一つ点検する原自身の様子が伝わってくる。このように海洋指導者実修所では、参加者の自主性を重んじた活動や実修が行われていたのである。

### (3) 第三回海洋指導者実修所

少年団日本連盟は1927（昭和2）年10月に北海道帝国大学から練習船忍路丸を譲り受けた。1930（昭和5）年には、その大改修を終え、船名を義勇和爾丸に改称した。1930（昭和5）年の海洋合同訓練と海洋指導者実修所は、この和爾丸を舞台として同時に行われた。訓練には、神奈川県立厚木中学校生徒16名、静岡県立庵原中学校生徒30名も参加した。このときの本部役員は、少年団日本連盟から原と田村で、陸の少年団で活躍していた奥寺龍溪も講師を務めた。また東京高等商船学校学生も囑託として運営補助に当たった<sup>31)</sup>。

原は3回目の海洋指導者実修の内容を、以下のように述べている。

然るに海洋指導者の実修する点は、勿論各種各様広汎である、第一先づ少年健児教育の根本理論は勿論、海洋少年指導上最も重要なりとする点が只単に技能教育のみにあらず、技能を通じての精神教育もあれば、技能を通じて奉仕作業もあり、作業能力を通じて実生活の活物作業もあるのである。

(中略)

況んや行路、航海上、潮流の落漲や其流潮方向、速力、風向、風力、気象天象の変化に注意することの実際問題は一旦船舟の当直士官として執務すれば、何人も、其注意上の要点に到着するのは、キャンプをする山の指導者が、幕営して第一に着手すべきことや、着眼するに要点が理解されるのと同様である。

1930（昭和5）年7月28日、東京湾を和爾丸で出航し、江ノ島に停泊して厚木中学校生徒を乗船させ、翌日には江ノ島から下田に移動、30日には静岡県三保松原に到着した。31日、庵原中学校生徒が乗船して、翌8月1日に三保から沼津沖を通って重須に停泊。2日は重須から大瀬崎に移動し、3日は大瀬崎から田子の浦へ移動。4日、田子の浦で実修所を解散、庵原中学校生徒も下船した。その後、大島や館山を經由して6日に横須賀で厚木中学校生徒を下船させ、同日中に築地の定繫錨地に到着した。この間、夜は基本的に寄港地に上陸してテントを張り、野営をしていた<sup>32)</sup>。

この時の海洋指導者実修所は海洋少年団員の海洋合同訓練と同時に行うことによって、「海洋少年健児が、実修所の実習の対象物として応用せられたこと乃ち端舟より本船乗退船の際指導者が実際払ふべき注意、実演、実習上、実際の海洋少年健児を応用した」という<sup>33)</sup>。前々年の神戸での海洋指導者実修所のような、教育実習的方法を採用していたのである。

#### (4) 第四回海洋指導者実修所

1931（昭和6）年の海洋指導者実修所からは、参加者は学校などの宿舎を利用して、海洋少年団の指導者としての指導技術や海と船の専門的技術を重点的に学ぶようになった。さらにこの時から、海洋指導者実修所に入所する前提として、一般に少年団の指導者に必要な野営技術や指導技術は陸の少年団の指導者実修所に参加することが求められた。これにより、海洋少年団の指導者は陸と海の指導者養成を受けることになった<sup>34)</sup>。指導者の合宿形式で海洋に関する知識や技能を養うという、海洋指導者実修所の在り方が確定的となったのである。

以上の方針を打ち出した1931（昭和6）年は、三重県の鳥羽商船学校が海洋指導者実修所の会場となった。原は海洋指導者教育の重点を、「海洋指導者として船艇の指揮、運用を最も嚴重に行ひ、発令の時機、注意の要点、保安の責務、団員の指導上の原理を其間に修得することにした。乃ち科目を運用航海、期間、信号、気象、水泳の各科とし、天文、潮汐、結索技術、国民体操等を其間に案配施行した」と述べていた<sup>35)</sup>。従来の海洋指導者実修所で行っていた訓練と、殆ど変わらない内容である。この時の運営には、原と田村があたり、また実修場所である鳥羽商船学校の教頭や教員が、航海術、水泳、機関、信号等についての講義を受け持った<sup>36)</sup>。

#### (5) その後の海洋指導者実修所

1932（昭和7）年以降の海洋指導者実修所については、『少年団研究』や、その他の少年団日本連盟の発行物などにほとんど記述がみられず、次のことが把握できるとどまっている。これらいずれの実修所でも原道太が所長を務め、同じく海洋部に属していた田村喜一郎や足立脩蔵に加えて、

経験を積んだ現地の海洋少年団の指導者も講師に加わり、指導者実修所での実修に関わっていた。特に1936（昭和11）年に行われた米子での海洋指導者実修所には、9名の鳥取県内の海洋少年団の指導者が講師として参加した<sup>37)</sup>。また最後の海洋指導者実修所となった1937（昭和12）年の長崎での海洋指導者実修所には、宿泊場所となった長崎県立水産学校の教員も実修の指導にあっていた<sup>38)</sup>。

この頃になると、日本には戦争の足音が近づいていた。その影響は原道太自身の文章「重大時局と海洋健児の奮起」（1934年）や「海洋少年健児の使命」（1935年）に見られる<sup>39)</sup>。ところが、以上でみてきた海洋指導者実修所に関しては、実修に当たった人物の中には、原のように退役海軍軍人で少年団活動に関与している者を除いて、海軍軍人は関与していなかったのである。

## 5. まとめ

青少年団体には、(A) 中央の指導者、(B) 各地で実際に活動している指導者、そして (C) 参加している青少年の3者が存在している。従来は (A) や (B) がそれぞれ持っていた理念や方針によって、(C) の指導にあたっていたという視点からの研究が多かった。(A) から (C) に対しては印刷物で、また (B) から (C) に対しては実際の活動で、という構図である。

本稿では (A) が (B) を指導するという視点から考察を進めた。(B) が一枚岩ではなく、地域の篤志家や学校の教員、校長など多様であったことは先行研究が指摘しているが、本稿では、まず、少年団日本連盟海洋部長の原道太 (A) も当初、海洋指導者実修所への参加者 (B) について、彼らが少年団についてどれだけの経験を持っているのか、十分に想定できていなかった。

英国のボーイスカウトが「少年団」として1910年代、日本各地で結成され始めたときから、地域を基盤とする少年団と、学校を基盤とする少年団があった<sup>40)</sup>。そのことは1920年代中頃から結成され始めた海洋少年団にも該当し、海洋少年団の指導者を養成する「海洋指導者実修所」の参加者の中でも、小学校の教員の割合が少なくなかったと考えられる。しかし原は当初、小学校の教員に多くみられた、少年団の初心者がこの実修に参加することを想定できていなかった。このことは、ある意味で奇妙である。原は少年団日本連盟の理事も務めており、海洋指導者実修所が開催される前に陸の少年団の指導者養成にも講師として参加しており、連盟に加盟している少年団の組織や特徴を把握していたはずである。結果的に原は、第4回の海洋指導者実修所から、陸の少年団の指導者実修を修了することを参加要件として、この問題の解決を図った。

海洋指導者実修所での実修内容は、船や海に関する技能や知識の習得と、海洋少年団員への関わり方に重点が置かれていた。例えば原は、少年団日本連盟海洋部の組織が強化されて海洋指導者実修所が開催されることになった1928（昭和3）年4月、「海洋健児部の大体方針」を打ち出した。その中で海洋少年団の訓練について、「少年の力量にて、達し得る程度の、簡易なる海上作業と、海上知識を修め」ることと述べている。また指導者に対しては特に次のように述べている<sup>41)</sup>。

徒らに、他の模倣に墮し、創作を欠ぎ、型に捉はれ、体裁を繕ふは、教育の大害を生ず、少年に過重の作業、心身の疲労、堅苦しき教養、難解の学理、空想に馳せ、実用を顧みざるが如きは、団員指導上、無益にして有害である。緩厳宜しき得、長短相補ふは、教養上、最も大切な要件である。

海洋少年団員の力量を個別に判断し、それぞれにあった柔軟な指導をすることを述べている。このことは、いわゆる軍事教練的な活動とは対極的な考え方であろう。本稿では海洋指導者実修所を対象としたが、ここにも、軍事的要素はほとんど見受けられなかった。この時期の海洋少年団が、もし、軍事的な意図を持って組織されていたのであれば、海洋少年団の指導者養成に現役の軍人が実修に関わり、その実修場所としても、海軍の軍艦や海軍兵学校を利用していたと考えるのが妥当である。例えば1929（昭和4）年、広島県宮島で海洋指導者実修所を開催した時、近く海軍兵学校から機材の貸し出しを受けていた。当時の海軍兵学校の校長は永野修身であり、原道太と海軍兵学校は同期の間柄であった。それにもかかわらず、原は兵学校ではなく、海岸でのキャンプを選んだのである。

団体の全国組織の指導者（A）が、各地の指導者（B）に対して行っていた実修では、（B）が青少年（C）を指導するにあたって必要な知識、技能、態度が教えられていた。本稿では海軍の影響も視野に入れた考察を行ったが、今後、改めて陸の少年団、青年団、処女会における指導者養成の研究を行い、戦前の青少年団体の特徴と、その背後にあると想定される政治的背景を含めて考察を進めたい。

#### 〈注〉

- (1) 熊谷辰治郎『大日本青年団史』1942年、400-401頁。
- (2) 君島和彦「浴恩館と青年団講習所」小金井市誌編さん委員会『「小金井市誌編纂資料」第三十編』、小金井市教育委員会、1992年、1-10頁。
- (3) 渡邊洋子『近代日本女子社会教育成立史』明石書店、1997年、145-149頁。
- (4) 中島純「少年団運動の形成と展開」上平泰博・田中治彦・中島純共著『少年団の歴史』萌文社、1996年、176頁。
- (5) これらの成立過程については、以下を参照のこと。拙稿「戦前における海洋少年団運動の形成に関する研究」『社会教育思想研究』第1号、九州大学大学院人間環境学府社会教育思想論研究室、2001年、41-82頁。
- (6) 伊藤昭臣「海の少年団史」『三十年のあゆみ』日本海洋少年団連盟、1981年、245頁。
- (7) なお、東京海洋少年団の団長だった小山武は少年団日本連盟の理事に任命された。「連盟情報」『少年団研究』第2巻第4号、1925年4月、47頁。

- (8) 「連盟公報」『少年団研究』第5巻第5号、1928年5月、33-34頁。「実修所」は特定の場所や設備をもつのではなく、全国各地の設備を利用して開催されるものである。海洋少年団の組織の変遷や教育内容については、以下を参照のこと。拙稿「戦前における海洋少年団の理念」『日本社会教育学会紀要』No.38、日本社会教育学会、2002年、47-56頁。
- (9) 原道太「海洋健児部の大体方針」『少年団研究』第5巻第4号、1928年4月、16-18頁。
- (10) なお同じ時に陸の少年団には、団員85,822名、指導者13,665名が登録されていた。
- (11) 他にも、新潟県の大日本柏崎海洋少年団は少年団員20名と指導者6名、岩手県の大日本釜石海洋健児団は少年団員43名と指導者6名だった。大日本少年団連盟『昭和十二年版大日本少年団連盟加盟団名簿』1937年。
- (12) 「連盟公報」『少年団研究』第6巻第6号、1929年6月、8-9頁。
- (13) 「岩手県連盟では今回海洋部を創設して釜石港に於て海洋部指導者実修所を開設し度いと連盟本部海洋部へ申出た」(「各地海洋少年団情報」『少年団研究』第12巻第6号、1935年6月、19頁)。
- (14) 「指導者実修生氏名」『少年団研究』第5巻第10号、1928年10月、18頁。
- (15) 原道太「第二回全国海洋少年合同訓練の実況と意見」『少年団研究』第5巻第10号、1928年10月、13頁。
- (16) 『昭和五年版少年団日本連盟加盟団名簿』少年団日本連盟、1930年。
- (17) 田村喜一郎「第二回海洋指導者実修所経過情況」『少年団研究』第6巻第9号、1929年9月、26頁。
- (18) 「連盟公報」『少年団研究』第12巻第9号、1935年9月、36頁。「連盟公報」『少年団研究』第13巻第9号、1936年9月、23-24頁。「連盟公報」『少年団研究』第14巻第10号、1937年10月、34-35頁。
- (19) 田中治彦『少年団運動の成立と展開』九州大学出版会、1999年、315-326頁。
- (20) 原道太「第二回全国海洋少年合同訓練の実況と意見」(前出)、12頁。
- (21) 田村喜一郎「今年の海洋合同訓練の実況と所見」『少年団研究』第5巻第10号、1928年10月、14-16頁。
- (22) 原道太「第二回全国海洋少年合同訓練の実況と意見」(前出)、9頁。
- (23) 田村喜一郎「今年の海洋合同訓練の実況と所見」(前出)、16頁。
- (24) 「第二回海洋少年団合同訓練指導者実修役員表」『少年団研究』第5巻第10号、1928年10月、17頁。
- (25) 「指導者実修生氏名」『少年団研究』第5巻第10号、1928年10月、18頁。
- (26) 「連盟公報」『少年団研究』第6巻第6号、1929年6月、8-9頁。
- (27) 「連盟公報」『少年団研究』第6巻第7号、1929年7月、4頁。
- (28) 原道太「海洋指導者実修生諸君に」『少年団研究』第6巻第7号、1929年7月、30-32頁。
- (29) 田村喜一郎「第二回海洋指導者実修所経過情況」(前出)、26頁。
- (30) 原道太「第二回海洋指導者実修所々見」『少年団研究』第6巻第10号、1929年10月、13頁。
- (31) 「連盟公報」『少年団研究』第7巻第10号、1930年10月、3頁。

戦前の海洋少年団の指導者養成

- (32) 「海洋合同訓練」『少年団研究』第7巻第8号、1930年8月、21頁。
- (33) 原道太「第三回三保海洋実修所と海洋合同訓練の経過とその特異性」『少年団研究』第7巻第9号、1930年9月、19頁。
- (34) 原道太「海洋指導者実修と教育教程の整理及当時の回顧」『少年団研究』第8巻第9号、1931年10月、8-9頁。
- (35) 同上、9頁。
- (36) 「連盟公報」『少年団研究』第8巻第8号、1931年9月、7頁。
- (37) 「連盟公報」『少年団研究』第13巻第9号、1936年9月、23-24頁。
- (38) 「連盟公報」『少年団研究』第14巻第10号、1937年10月、34-35頁。
- (39) 原道太「重大時局と海洋健児の奮起」『ジャンボリー』第13巻第2号、1934年2月、6-7頁。原道太「海洋少年健児の使命」『少年団研究』第12巻第1号、1935年1月、5-8頁。
- (40) 具体的には、次の文献を参照のこと。田中治彦『少年団運動の成立と展開』（前出）、315-318頁。
- (41) 原道太「海洋健児部の大体方針」（前出）、16頁

**The training for Sea Scoutmasters before WWII in Japan**  
**– Who got into the training courses and what they learned –**

**Tomohito ENNYU**

The aim of this paper is considering the character of the Sea Scout activities at prewar Japan, focusing on the training courses for Sea Scoutmasters which were held in 1928-1937, by examining who got into the training courses, and what they learned there. The training courses were held at mercantile marine schools, various beaches, and the training ship belong to Boy Scout of Nippon.

This paper is a part of the research on leader training of the youth (including men and women, boys and girls) organizations at prewar days. Through the leader training, the headquarters of youth organizations taught leaders, who organize the activities practically, knowledge and skills. Moreover, the ideas as the leaders of the youth organizations, and the attitude how they guide members were taught. These could not be taught through magazines or books of the organizations.

Previous research has revealed that the Scout troops at prewar days can be divided into two types. Troops based on schools, and troops based on the regions. This could be said to the Sea Scout troops. Not a few teachers at elementary schools participated in the training courses for Sea Scoutmasters. These school teachers tended to have no experience as scout leaders, so that since 1931, participant to the leader training course for Sea Scoutmasters were requested to complete a leader training course for Scoutmasters. There, the participants study skills and knowledge concerning ships and sea, and how they guide Sea Scouts. The interference of naval forces were hardly seen at the training course.